
ピーコックの悩み

朝倉微葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピーコックの悩み

【Nコード】

N4504J

【作者名】

朝倉微葉

【あらすじ】

もどかしいけど、待ってるよ。あなたが振り向いてくれるのを。

街から列車で三時間。小さな村に、一軒の研究所があつた。

「おはようございます」

朝、少女の澄んだ声とともに、ドアに掛けられていた鈴が鳴った。その音が所内に響いたのは実に四日ぶりであり、所内の者たちは、ここのあるところ一度も建物の外に出ていなかったことを悟る。

床に積もった埃が、掃除が行き届いていないことを物語っているが、少女は気にも留めず、手入れされた長い黒髪をなびかせながら、奥へと進んでいく。背筋を伸ばして歩くその姿から、しっかりとした教育を受けているのがわかる。ふいに左手にある部屋の扉が開き、白衣を着た、若い男性が出てきた。

「おはようございます。博士は奥にいらっしゃいますか」

「ああ。おはよう、ソフィー。たぶんそうだと思うけど。あ、あと、ケヴィンもいる」

くすくすと笑いながら、男性は、ソフィーと呼ばれた少女に告げる。彼女は、ケヴィンという名を聞いて、少しだけ頬を染めると、お礼を言つて、小走りに男性の横を通つていった。

「相変わらず、あの子も面白いなあ。あんな奴を、ねえ」



「おはようございます」

本日二回目の挨拶をしながらソフィーが入った部屋は、この研究所で最も大きい。しかし、至る所に器具や薬品の入った瓶が散乱しており、足の踏み場もない。人がいる気配はするが、姿を確認することができなかった。返事は無いが、ソフィーは遠慮なく部屋の奥へと進んでいく。長い真っ白なワンピースの裾をつまんで、ぴよんぴよんと物を跨いでいく。

「まったく。ここに人って、みんなだらないんだから」

大きな棚の裏側を覗くと、そこには木の机と椅子があり、傍には二人の男性がいた。どちらも白衣を着ているが、一人は真つ白な髪と髭を生やした、優しそうな顔つきの老人だ。もう一人はというと、ぼさぼさの髪で眼鏡を掛けた、小柄で頼りなさそうな少年だった。彼の胸元につけられた名札には、ケヴィンと書かれている。

ソフィーが声をかけると、二人はようやく彼女の存在に気がついたようだった。博士はともかく、ケヴィンは研究に対する集中力だけが取り柄なのではないかというような少年だった。

「おや、もうそんな時間なのか。作業に没頭していて気づかなかつたよ。ケヴィン、ソフィーちゃんにお茶を淹れてあげなさい」

「ありがとう。いつものでいいわ」

「は、はい！」

ケヴィンは一瞬、びくつと身を縮ませ、急いで準備をし始めた。

博士はテーブルの上のピーカーなどを退かし、椅子に座る。そしてソフィーを向かい側に座るよう促した。

「えっと、先週はどこまで話したかね……」

彼女は化学について学ぶため、週に一度、こうして研究所を訪れ、博士から講義を受けている。だが、勉強は外国語や音楽のみで十分だという親の反対を押し切り、こつそりとこの場所に通う理由は、鈍感な一人の少年を除いて、研究所内の全員が知っていることだった。

ソフィーは博士の話を聞きながらメモを取り、ときどきわからないことがあると質問をした。その背後では未だケヴィンがもたもたとお茶の準備をしている。湯は沸いたのに、肝心の紅茶の葉が見つからないらしい。先週は棚の中に隠れていたし、その前は床の隅に置いてあったが、今日はそのどちらにも見当たらない。

そして、ようやくソフィーたちの前に紅茶が出された頃には、ほ

とんど授業も終わりに近づいていた。しかし、葉っぱが見つかったところで、今度はティーカップが見当たらないらしく、それはビーカーに入って出てきた。「今日はこの辺にしておきましょうか」博士はそう言つと、自分に用意されたビーカーを手に取り、紅茶を口に含んだ。つられてソフィーも、このビーカーは何に使っていたものののだろうかと考えつつ、一口飲む。

それから、ケヴィンも交えてしばらく世間話が広げられた。一日中研究室に籠りっぱなしの博士とケヴィンにとって、ソフィーがもたらす外の世界の情報というものは、実に興味深いものだった。しかし、ケヴィンはどんな話題でもすぐに話を化学に持っていきたがるので、時折彼女からお叱りを受けていた。

「それでね、今日は街のお祭りでしょう？ 踊り子としてアイリスが街に行っているんですって。ああ、いいなあ。わたしも行きたかったな」

ソフィーは、今頃祭を楽しんでいるであろう友人を思い浮かべ、不満そうに唇を尖らせた。

「ほう、そうかそうか。では、行ってくればいいではないか」

予想外の発言に、ソフィーは驚き、首を傾げた。

「ちよつと二人で、街までお使いを頼まれてくれんかね」

「お使い……というത്？」

「知り合いに、探してもらっていた研究書が見つかったようだな。悪いが取ってきてくれんかね」

ケヴィンとソフィーは顔を見合わせる。先に目線を反らせたのはソフィーのほうだった。

「ぼ、僕は大丈夫です。もうちよつと研究を続けていたかったけれど……博士の頼みなら、お引き受け致します」

「わ、わたしも……ですか？」

ソフィーは赤くなった頬を隠すように、軽く俯いた。

「もちろん強制はしないさ。あんまり帰りが遅くなると家の人たち

が心配するだろうしなあ」

博士は彼女の心を読み取ったように、にやにやと笑っている。

「い、行きます行きます！」

ソフィーのわかりやすい態度に、博士は満足したようで、机の上にあった紙に、さらさらと目的地の古書店の住所を書き出した。そして、足元においてあった、もう何年も使っていると思われる古い鞆の中から、無造作に何枚かの紙幣を取り出すと、紙と一緒にケヴィンに手渡した。

「えっ…博士、街へ行くには、この金額は多すぎませんか？」

ケヴィンは金を返そうとしたが、博士はこれを拒否する。

「たまにはこれで、楽しんでくるがよい。若者たちよ」

博士はウインクをすると、笑いながら部屋を出て行った。



列車の客室の中、白衣を脱ぎ、普段着に着替えたケヴィンと、二人は向かい合って座っていた。

「それがまた凄くてさ。……ソフィー、大丈夫？ 調子悪いの？」

ケヴィンは、俯いているソフィーの顔を覗きこんだ。

「な、なんでもない！」

大好きな人と同じ列車の同じ客室で二人つきりという状況に緊張している、だなんて、とてもではないが今の彼女には言うことができない。

ケヴィンは列車も好きなようで、いつもより口調が高らかとしている。始終化学はもちろん、さまざまな分野の話をしている彼に付き合って、曖昧な返事を繰り返していたソフィーは、実際のところ、彼の言っていることのほとんどが、頭に入っていなかった。ソフィーはつまらなさそうに、溜息を吐いた。



列車を降りれば、そこは既に祭りの喧騒が広がっていた。

この辺りで一番大きな都市ということで、周囲の村々からも、客が来ているようだった。

「さて、まずは目的を果たさないと……」

二人は人ごみの中、住所だけを頼りに古書店を探す。しばらく歩いた後、人がほとんどいない地域に、その店を見つけた。中に入ってみると、博士と同じ位の年齢の老人が、一人で店番をしていた。

「いらっしやい、ずいぶんと若いお客さんだねえ」

ケヴィンが事情を話すと、老人は博士が頼んだ研究書を取りに、店の奥へと入っていった。その間、二人は店内をぐるりと見渡す。それぞれの好みから、自然とソフィーは文学の棚に、ケヴィンは研究書の棚へと近づいていく。ソフィーが適当に気になるものを取り出し、ぱらぱらとめくっていたが、ふとケヴィンの方を見ると、彼はすでに、黙々となにかを読んでいる最中だった。

「お二人さん、頼まれていたもの、見つかりましたよ」

老人がそう声を掛けたので、ソフィーは手にしていた本を棚に戻し、カウンターへと向かった。彼女はケヴィンの名を読んだが、未だ本に集中していてぴくりともしない。

「まったく、あいつは……」

ソフィーが溜息を吐いたのを見て、老人は笑った。

「お嬢さん、お綺麗なのにお相手があんな風じゃ、大変ですな」

「ええ、本当に……って別にそういう間柄ではありません！」

ソフィーが髪型を変えても、新しい服を着ても、ケヴィンがそんなことを気にしたことは一度もなかった。いくら気合を入れたところで、今までまったく効果があつたためしがない。ケヴィンが好きなのは、あくまでも研究である。

「ほら、ケヴィン、行くわよ」

老人にお礼を言うと、ソフィーはケヴィンの元に駆け寄った。

「うん…もうちょっと」

朝に無理やり叩き起こされた人のような返答をする彼に、思わず呆れてしまう。

「そんなに欲しいんだったら、博士から貰ったお金で買えばいいじゃない。使ってもいいっておっしゃっててくれるんだし。別にいいわよ。わたしは」

「ソフィー」

「何？」

「これ、いくらだと思っ？」

ケヴィンに囁かれ、値段を確認したソフィーは固まってしまう。

「帰るお金がなくなっちゃうとまずい……。ごめん、もう少しだけ読んでいくから、先にお祭り見てきて」

ケヴィンは、ソフィーに金を渡すと、無理やり店の外へと送り出した。

「も、もう。ちょっと！……女の子の扱いが酷すぎるんじゃないかな」

しかたなくソフィーは一人で、とぼとぼと歩き出した。



それからしばらくして、二人は広場で合流したが、すでに昼をまわっており、大したこともせず、帰らなければならない時刻となった。

列車に乗ると、ソフィーは、本日何度目かの溜息を吐いた。

「ソフィー、一人にさせちゃってごめん。何か楽しめた？」

ケヴィンは少し申し訳なさそうに、上目遣いで彼女に尋ねた。

「ええ。おかげで友達の踊りも見ることができたし、楽しかったわ」
ソフィーは内心、ケヴィンと二人で行動できるものだと思っていたから、期待していたよりも楽しくなかった。一瞬の沈黙の後、彼女から口を開いた。

「……ねえ、なんでケヴィンはそんなに熱心に勉強してるの？」
ケヴィンは一瞬きよんとしたが、すぐに優しい笑みを浮かべる。
「やっぱり、楽しいからかな。そりゃあ、他の人とか社会のためっていうのあるけど、一番はそれだと思う。単純に、僕はこういう分野が好きだから。知らなかったことを知るのって、すごく面白い」
いつもは頼りないケヴィンだったが、今の彼は、不思議と凛々しく見えた。その純粋な眼差しを見てソフィーは、ああ、これだ、と思った。

これが自分が彼に惹かれている理由。そうやってなにかに夢中になつていくときのケヴィンは、誰よりも輝いて、生き生きとして見えた。

だんだんと成長していく中で、自分がどんな大人になるのか。周りと同じように、いずれは妻となり、母親となり、死んでいく運命なのだろうか。それが嫌だという訳ではないのだけれど、ただ、なんとなく不安になつてくる。

そんな思いを抱えているソフィーにとって、同じように成長してきたはずのケヴィンの、いつまでも夢と希望を秘めた心は、少しまぶしくもあつた。

「あ、あのさ、ソフィー、これ」

ケヴィンは小さな箱をソフィーに手渡した。

「何？これ」

「開けていいよ」

首をかしげながらソフィーが箱を開けると、中には丸くて緑色をした石のついたネックレスが入っていた。驚いてケヴィンの方を向くと、彼は恥ずかしそうに、さっと視線を逸らした。

「えっと、さつき君を探しているときに見つけて……その、いつもお世話になつていうつていうか、迷惑掛けてるつていうか、とにかく……。今日はごめんなさい」

我儘を言つたのを気にしているのか、ケヴィンはぺこりと頭を下げ

た。

「あ、ありがとう。わたしだっていつも、ケヴィンにはいろいろやつてもらってるし、お互い様なんだけど……」

ソフィーがネックレスについた石を、車窓から差し込む夕方の太陽の光にかざすと、最初は緑色だと思っていたが、青や紫、など、たくさん色が混ざり合って、虹色になり、きらきらと光っていることがわかった。その美しさに、ソフィーは息を呑む。

「これって、ピーコック・カラー・オパール……。覚えていてくれたんだ」

「えっと、僕は記憶力だけはいいから」

その宝石は、紛れもなく、彼女の誕生石だった。

「面白いよね。この石」

そう言うケヴィンは、宝石についての蘊蓄を話し出した。いつものことながら、止まりそうもない。せつかく嬉しさでいっぱいになっていたソフィーも、これには思わず笑ってしまった。

「……なんかさ、こう、他に言うことがあってこれをくれた、とかじゃないの？ そ、その…好きだ、とか……」

「え？ どういうこと？」

少しだけ期待していたのだが、今回はこれ以上何もないらしい。

どれほど着飾っても、見て欲しい人に見てもらえなければ意味がない。本当に綺麗だといって欲しい人に、綺麗だといってもらえて初めて救われる。そんなところが、自分と雄の孔雀は似ている。そう思ったソフィーは、この宝石が自分にぴったりと、もう一度、今度は心の中で笑う。

「そろそろ降りる駅だね」

気がつくと、あっという間に時が過ぎ、窓の外の景色は、都会の建物が密集しているものから、のどかな田舎のものに変わっていた。

「さあ、行こう。戻ったらやりたいこと、いっぱいあるんだ」

満面の笑みを浮かべ、ケヴィンは立ち上がった。

ソフィーもその後が続く。子どものように駆けていく彼の姿を追いかける。今はまだ、自分のことをちゃんと見ていてもらえない。

でもいつか、きっと、報われる日が来ると信じ、それまでは頑張ろう。彼女はそう思うと、さっそくつけているネックレスにそっと触れた。大丈夫。ピーコック・カラー・オパールの宝石言葉は、『求愛の予感』だから。

（後書き）

珍しく日本とか現代とかを舞台として意識しなかった作品です。
おかげでぐるぐる先生には大変お世話になりました。主に登場人物
の名前の面で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4504j/>

ピーコックの悩み

2010年10月20日16時41分発行